



第 27 号  
 月 1 回 発 行  
 ひの心を継ぐ会  
 〒799-1336  
 住所: 愛媛県西条市  
 上市甲 720-1

綱 領

- 私達は明德を明らかにします
- 私達は国家の鎮護となります
- 私達は 大和世界を建設します

神道(八)(大和世界の建設)

竹葉 秀雄

古事記

宇宙の創始

一言

新約聖書のヨハネ伝 福音第一章には次のように記せられている。

太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。この言は太始に神とともに在り、萬の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。之に生命あり、この生命は人の光なりき。光は暗黒に照る。而して暗黒は之を悟らざりき。神より遣されたる人いでたり、その名をヨハネという。この人は證のために来れり、光に就きて證をなし、また凡ての人の彼によりて信ぜん為なり。彼は光にあらず、光に就きて證せんが為に来れるなり。もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき。かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき。されど之を受けし者、即ちその名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。斯かる人は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲によらず、ただ神によりて生れしなり。言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。ヨハネ彼につきて證をなし、呼わりて言う「わが後にきた者は我に勝れり、我より前にありし故なり」と、我が曾ていえるは此の人なり。我らは皆その充ち満ちたる中より受けて、恩恵に恩恵を加えらる。律法はモーセによりて与えられ、恩恵と真理とはイエス・キリストによりて来れるなり。未だ神を見し者なし、ただ父の懐裡にいます独子の神のみ之を顕し給えり。

第三章 農民生活の倫理的考察

菅原 兵治

第二節 批判

武の本義

猶この瀆武的態度の批判の一資料として「武」の本義に就いて一言して見たいと思う。吾々が敵に対して三つの態度を持し得る。第一は逃避的態度、第二は闘争的態度、第三は尚武的態度である。敵に対し乍ら、負けるのが怖い、命が惜しい、三十六計逃げるに如かずで泣寝入りするのが逃避的態度であつて最も卑怯なる弱者の態度である。之に対して生命力旺盛にして敵を恐れぬはよいが、未だ其の力が洗練せられず、敵と見れば、時には喧嘩を買って強い敵を作つても、直ちに闘争を事とするのが第二の闘争的態度である。然るに其の力が非常に鍛えられ練られて来ると、下らぬ輩を相手にしてつまらぬ争をすることがうるさくなつて来る。「鷹立眠るが如く、虎行病めるが如し」という語があるが、虎の様に強いのになると、小猿や犬猫が側で如何に吼えついで戦いを挑んで来ても、見向きもせずのそりのそりと歩いて行く。闘えば十分勝ち得る実力を有しながら容易に闘わず、一睨みでくつと押えて行ける處に真の「武」的態度が存する。だから「武」という字は「戈」を「止」めると書く。決して戈を取つて闘うことを好むに非ずして戈を止むる―無道の者の戈を止めしむる處にこそ武の真の義があるのである。(戈を取つて闘うの意味の文字は「戒」であり、これが財(貝)を奪う為に闘うに至れば「賊」となる。)かかるが故に、一度鞘を拂えば必ず敵を斬る実力を有すれば有するほど、腰の刀は伊達には抜かぬ処にこそ、真の日本刀の生命、日本武士の真面目が存するのである。刀を抜かずに罪悪を済度する―其処にこそ真の尚武、

「神武」「聖武」の新精神が存せねばならぬ。此の武の真義は、亦瀆武的騷激的態度批判の好箇の素材たり得るであらう。

以上は実に偏した方面の態度についての批判であるが、次に文に偏した方面の諸態度に就いて一応の批判をなすこととする。

### 『坊っちゃん』雑感

三浦 夏南

大学生になって学問を始めたころ、夏目漱石の『坊っちゃん』を読んで感銘を受けたことを今もよく覚えていて、夏目漱石の小説に影響を受けて一回生のころは近代日本文学を読むことに熱中した。あのころには何故漱石の小説が面白いのか自分でも理解できていなかったが、漱石の作品の中には言葉にし難い懐かしさがあり、強く引き付けられた。夏目漱石は幕末に生まれ、大正にこの世を去った作家であり、明治の御代を生きた人である。時代の遠く離れた、それも明治維新後の活気ある帝国時代の作品に何故戦後の倦怠感の中を生きる平成生まれの私が懐かしいと感ずるのか。不思議に思いながらもそう感ずるのだから仕方ないと思っていた。最近再びこの書を紐解いてみると、漱石独特のユーモラスでシニカルな表現にくすりと笑いながらとても面白く一気に読み終えた。

読んでいて気になったことの一つに「瓦解」という言葉がある。清が下女にまで成り下がらざるを得なかったのは瓦解の後、清の家が没落したからで、瓦解以前は身分の高い家の娘であったという。この「瓦解」が何を指すのかといえば、江戸幕府の崩壊と明治維新を指す。ここから坊っちゃんにとっての明治は江戸時代の瓦解であると捉えられていることが分かる。この瓦解がなければ、元は旗本であった坊っちゃんも東京を捨てて田舎まで教師として出向いて来ることもなかったであろう。何故ここに違和感を感じたのかといえば、幕末の志士達の書に感動し、江戸時代の学問を勉強した私にとって、明治とは国体に基づいた変革、つまり「維新」であった、江戸の「瓦解」とはあまりイメージしていなかったからである。ここに明治という時代が孕んでいた矛盾というものが存在する。しかしこれは矛盾であって矛盾ではない。坊っちゃんの言う瓦解以前の日本の古き良き姿こそ、我々が維新の中に見る日本人らしい日本人の姿なのである。つまり坊っちゃんが否定的に捉えている明治時代とは、近代化＝西洋化に毒され、江戸時代の日本人らしい姿を失いゆく西洋かぶれの近代日本であり、国体に基づいた維新日本ではない。だからこそ、平

成の時代の日本社会に対して、強い違和感を感じていた当時の私には、坊っちゃんが明治の人とは思えなかったのである。坊っちゃんはこの平成の御代に居ても全くおかしくない。明治と平成で日本が抱える問題に程度の違いはあっても本質的な違いはないからだ。西洋かぶれで、打算的で、裏表があり、女々しく、狡猾と呼ぶにはあまりにも虚弱で無自覚な赤シャツや野だいこのような人間が巷にはあふれかえっているのではないか。それとは裏腹に坊っちゃんや山嵐やうらなり君のような、弱点のない人物ではないけれど、人間味があって、素直な、人情のある、筋の通った人間は異端児として煙たがられる世の中である。高貴なる身分であったはずの清は心こそ、昔のまま上品であるが、下女として働かねば暮らして行けない。元は旗本、それ以前の祖先も悉く挙げる事が出来るといふ坊っちゃんも月給をもらいにはるばる愛媛まで出向かねばならない。うらなり君に至ってはマドンナに裏切られ、祖先が長年暮らしてきた屋敷を置いて、僅かな昇給の為に九州へと向かわねばならぬのである。坊っちゃんと山嵐の抵抗も些細なものと言わざるを得ない。まさにこの濁世においては、坊っちゃんは文字通り坊っちゃんに過ぎないとの皮肉さがある。軽薄で偽善的な商人が栄え、真面目な百姓や仁義ある侍には生きがたい世である。それでも我々は赤シャツや野だいここに一泡吹かせねば止まぬと坊っちゃんと山嵐のコンビを応援するのである。

我々が自治の復興を目指すのも、坊っちゃんや山嵐、うらなり君が安んじて生活し、活躍することが出来る場所を再生したいからである。言うまでもなく我々も鼻持ちならぬ赤シャツや野だいこの溢れかえる社会では暮らして行けない。真面目で素直な百姓は自然と調和し、家族と平穏に暮らすことをのみ願うのである。剛毅なる侍は自らの使命の遂行のみを生きがいとするのである。このような素地を持った人々はわが国に多くいるのに、彼らが資本主義経済とやらの下で赤シャツや野だいこの下で働かされることは伝統ある我が国としてはあってはならない。彼らの如き商人的、官僚的人間こそ、士と農に仕えなければならぬのである。農本商末、抑えるべきものを抑え、伸ばすべきものを伸ばさねばならない。漱石はこの感情を文学として表現したが、我々は自治社会の再生として具体化する必要がある。明治に現れた復古の感情は、令和の時代に実現すべきである。我々は具体化するために日々実務に勤しみつつあるので、その多忙さの為に心を失いやすい。初心忘るべからずであり、特に初めの感情を忘れてはならない。漱石の小説は復古の感情を思い出させてくれる。これからも時折時間を見つけては近代文学を読んでみたいと思う。

## とよくも農園だより

## 三浦 杏奈

息子の出産から一年が経過しました。この一年は、初めての子育てに奮闘し、農業にはほとんど携わることができていませんでした。私より約一年半早くに卒業を終えた義姉と、農業を交替してもらっていましたが、息子も成長し、私も外に出られるようになったので、今月からまた徐々に農業に復帰し、義兄と共に畑に出ています。

日ごとに暑さが増し、朝夕の涼しい時間帯でなければ作業をするのが厳しくなってきました。最近朝5時前後に起床し、身支度を整えて参拝を終えると、庭に出て家庭菜園の様子をみます。今年は、初めて敷地内に家庭菜園をするスペースを設け、十五種ほどの野菜を育てています。野菜によって、毎日の芽かきや剪定・収穫を必要とする手のかかる野菜もあれば、収穫まで水やり以外ほとんどお世話の要らない強いものもあります。風で倒されたり、虫に食べられたり、水不足や肥切れで萎びたりしても訴える術のない野菜たちは、人がお世話してくれるまで、けなげに畑で待っています。野菜ごとの成長速度に合わせてその声を聞き、対応する過程は、育児と似ています。困難を前にして何もできず、母の助けを待つ赤子のように、庭の野菜はとても愛おしく、食卓にあがると感慨深いものがあります。

家庭菜園の見回りを終えると、家の近くにあるネギの畑へ収穫に向かいます。義兄がネギを引き抜き、鎌で根を切り落とします。私とそのネギを素早く受け取り、コンテナにどんどんためていくという単純作業ですが、慣れてきて呼吸が合えば、すごい速さで収穫が進みます。その後ネギを持ち帰り、半日かけて出荷作業をします。丁寧に消毒して育てても、ネギは病気に弱く、さらには乾燥にも雨にも弱く、綺麗なネギを収穫するのは極めて困難です。ネギは定植から収穫までが二カ



月前後で回転が早い作物です。年内にもう一度定植予定なので、出荷作業にさく時間が非常に多くなりそうですが、義兄や、休日に作業に参加する夫とゆっくり会話が出来る有意義な時間と捉え、気分わずやっつけていきたいと思います。

日差しの強い昼の時間帯は、家で息子たちと遊んだり、お昼寝をしたりとゆっくり過ごすこともあれば、倉庫の整理や事務仕事・アスパラガスや里芋の草引き・家庭菜園の手入れなど、ちょっとした仕事をしているとあっという間に時間が過ぎてしまう日もあります。そして夕方があると義兄と共にアスパラガスの収穫へとハウスへ向かいます。昨年の秋に定植したので、今年の春に萌芽しましたが、地下に養分をためるために、収穫せずに親茎として残していました。その親茎が十分すぎるほど茂ってきたので、今月から収穫が始まりました。

ハウスから家までの帰り道は、水田に囲まれ涼しげな風景が広がっています。汗をかいた私達には心地よい風を感じながら一日の仕事の終わりを迎えます。家に着くと息子たちの「おかえりー!」という元気な声と美味しいご飯の香りに包まれて幸せな気持ちになります。忙しい日々の中で、毎日の生活の中にある幸せを感じながら日々丁寧に暮らして行きたいと思います。



## ★今後の予定

来月も、今月に引き続き勉強会は休止致します。復帰の目途が立ちましたら、本稿にてご連絡差し上げます。

## ★一燈照偶 万燈照国

ひの心を継ぐ会は竹葉秀雄・近藤美佐子両先生の精神を継承し、発展させることを目的として生まれた会です。一人の「ひ」の精神が周囲の人々の心に「ひ」を燈し、やがてそれが国を照らす「ひ」になることを願い、活動を行っております。皆様には何卒ご理解とご支援を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

## ★年会費

- ・ 一般会員 三千元
- ・ 賛助会員 一万円
- ・ 特別賛助会員 三万円
- ・ 支援会員 一万円

## お詫び

SSSS4r 新型コロナウイルス感染症の流行が拡大している状況を受け、第三回定期総会並びに「近藤美佐子先生を語る会」の開催を中止させて頂きました。総会資料は、会計の関係上、月報七月号にてお送り致します。ご了承ください。

